

## 『コロナ時代のパンセ』

2021年07月16日

辺見庸氏を『もの食う人びと』で知った。ジャーナリストとして世界の情報を集め、それを切って貼って、配給する仕事に疑問を感じ、人間の原点である「もの食う」ことに焦点を当て、世界を訪ね歩き、食べ続けた。グルメを求めての旅ではなく、危機に直面している国々の人々が何を食べ、何を考えているかを書いたルポルタージュである。ご相伴に与りたいと思うような食事ではなく、もの食う人びとの極限の姿と文化を写し取っている。辺見氏に惹かれ、数冊の本を読み、彼の鋭い視点と力強い言葉に圧倒されて来た。

4月に、辺見氏は『コロナ時代のパンセ』を上梓している。2014年から7年間、日本と世界を凝視して綴られた86本の時評である。辺見氏は、「ITが発達しIPS細胞技術がすすんでも、まるでひきかえのように失っているものがある。〈人間の内面への切実な関心〉がそれであり、〈貧者と弱者への共感〉がそれだ」と言い、この二項目が彼の関心事の全てである。「内面への関心」と「弱者への共感」が抜け落ちた世界、別な言葉で言えば、曖昧、中途半端、思考停止、責任を取ることがない、惰性に流され続ける世界に、COVID-19のパンデミックが襲った。政府の対応は後手に回り、収集がつかない。辺見氏は、緊急事態宣言の発出、私権の制限、自由の制約を求めたのは、政治権力ではなく、民衆と野党であった。そこに、〈国家〉幻想が立ち上がって来たと言う。行き先は「戦争」ではないか。集団的自衛権を執行できる安保関連法があり、秘密保護法、共謀罪、土地規制法、デジタル法と国民を監視する法は整っている。辺見氏の現実認識は限りなく不気味である。

事故か自殺か不明の死を遂げた先輩記者は、「おまえな、オリンピックと戦争と天皇には勝てねえんだよ」が口癖だった。その勝てない天皇制に関する記述は本書のメインテーマではないが、やたらに多い。最も気になることなので、一部を紹介し、感想を書きたい。まず、「エンペラーが病をえると社会がたちまち停滞し、人びとの生活に悪影響を与えるような天皇依存型の心性を基盤とした社会だったのですか。そのような社会でしかなかったのですか！」と問いかけている。哲学者の内田樹氏が「僕は天皇主義者に変わったのです」と宣言した。辺見氏は「内田氏は『天皇制と立憲デモクラシーという「氷炭相容れざるもの」が拮抗しつつ共存している』というのだが、これも倒錯ではないか。凡眼には、天皇制とそれを強固にささえるメディア・大衆社会、および天皇制をどこまでも利用する政治の荒廃は、はっきりとみてとれるけれども、氷炭相容れざるはずの、意思的にたたかう『立憲デモクラシー』なるものは、どこにもみあたりはしない」と言い切る。また、「天皇夫妻の存在を、晴れがましいことの象徴とし、この国の“モラル・スタンダード”であるとするのも知的後退である」と言い、「たとえば、天皇制とはなにか？ それはこの社会にとって必要欠くべからざるものか。天皇制がなければ社会は崩壊するともいうのか。平成天皇は昭和天皇の戦争責任を公式に批判したが、天皇はなぜ一般的な『人権』がないのか—等々」と、問いかけている。人間存在と社会の在り方をラディカルに問う辺見氏にとって、天皇制ほど不可解なものはないであろう。

キリスト教は地上にあるものを神としない信仰が根幹である。今の天皇は「現人神」ではないが、神的存在として、祭り上げられている面は消えていない。半面、物言うことを禁じられて「人権」を奪われ、国民の下に置かれているような気の毒な存在でもある。辺見氏は、天皇を自分の意思を表現できる人権を持つ人間に解放すれば、知的後退、思考停止を強要する天皇制からも解放され、立憲デモクラシーは確立されると主張している。